博物館学雑誌 第23巻 第2号（通巻28号）25～36ページ 1998年3月

【論文】

子どもの博物館の機能に関する一考察
—メッセージ伝達機能を中心に—

The Function of Children's Museums

柘 植 千 夏*
Chinatsu TSUGE

〈Abstruct〉

Children's museums in the U.S. and overseas countries are now drawing the attention in Japan. However, it is always superficially thought that the method of exhibits in these museums is interesting. Museums for children have important functioms as follow.

1. to support the growth of children
2. to give opportunities to learn by doing(hands-on)
3. to bring social interaction between visitors
4. to communicate messages to the next generation

This paper describes the function of communicating messages to the next generation that is required of children's museums, using the example of the Children's Museum, Boston. The exhibit called "The Kids Bridge" at the museum has a message "Find not only a negative meaning which causes racial discrimination but also a positive meaning from the diversity in the multiracial nation of the U.S., respect individual characters, and make a comfortable society! Of course, the contents of the message will vary from area to area. Therefore, it is necessary to create and actualize a unique message, without imitating other museums. To communicate messages to children, adults should create messages not based upon their own one-side values. When each childern's museum has a system of discussion on a variety of problems in the community with the visitors through its exhibits and activities, it would be more effective.

はじめに

生涯学習機関としてあらゆる人のために開かれた存在としての博物館を求める声が聞かれるようになって久しい。その声に応えて、夜間の開館時間延長やバリアフリーの視点からの施設整備など各地の博物館で努力が重ねられている。このような時流の中で、大人だけでなく子どもにとっても魅力的で楽しく学ぶことのできる博物館の在り方が模索され、参加体験型の展示や子どものためのコーナーも多くの館で見られるようになった。子どもが興味を持って、自分の知りたいことを自分のペースで学んでいくきっかけと場を博物館がどのように提供しその学習を支えていくのか、これは今後も常に博物館運営の課題となっていくだろう。

そこで、近年、注目を集めているのがアメリカをはじめとする海外の「子どもの博物館（children's

＊お茶の水女子大学大学院

平成10年1月9日 受理

museum)」である。所有を表す -'s からわかるように、これは子どものための博物館で、館全体の設備や展示内容、展示手法、活動の全てが子どものためのものになっている[1]。幼い頃から博物館という環境に慣れ親しむことは、自然に博物館を自分たちのものとして考えることにつながる。思い切り走り回り遊びながら、知らず知らず社会の仕組みや科学、歴史、異文化等について体全体で学んでいくことのできる博物館は子どもにとって魅力的な場所であろう。

日本でも館の一部に子どものための展示を準備したり子どものための学習援助活動を行うだけではなく、独立した子どもの博物館を作ろうという動きが起こっており、実際、いくつかの館が開館している。こうした動きに伴い、子どもの博物館については「体験学習の場である」といった一側面のみの理解、または「ハンズ・オンの展示を使った施設」といった形態論上の理解のみでなく、さらに、もう一歩踏み込んだ社会的な機能に着目した議論も徐々に見られるようになってきており、今後もさらに活発なものとなるであろう。

本論文はこうした状況をふまえ「子どもの博物館」の展示について、試論として4つの機能的特徴を挙げ、その中で主にメッセージ伝達機能について考察するものである[2]。

1．先行研究

100年近くの子どもの博物館の歴史を有するアメリカではその数は200館以上にものぼると言われ、各博物館から多くの成果が発表されている[3]。また、これらの子どもの博物館の全体像を把握する上で特に重要なものとして次の2つの文献を挙げることができる。1つめは1987年発行のヴィクター・レグニア(Victor Regnier)によるイントロダクションから始まる *Children's Environments Quarterly* Vol.4, No.1, Spring, (1987)である[4]。これは、子どもの博物館の特集号で、12の子どもの博物館に関する論文が掲載されている。1）アメリカの子どもの博物館の発達史、2）理論と実践の関係、3）展示設計、4）他館の経験からも学ぶことの重要性、5）エバリュエーションの5つをテーマとしているこの論文集は最も系統的な子どもの博物館研究の1つとして考えられる。

2つめは265館にも及ぶアメリカの体験型の博物館のガイドにもなっているジョアン・クリーヴァー(Joanne Cleaver)の *DOING CHILDREN'S MUSEUMS* (1992) である[5]。クリーヴァーもアメリカの子どもの博物館が歩んできた道をマイケル・スポック (Michael Spock)やフランク・オッペンハイマー (Frank Oppenheimer) の業績、デューイやピアジェの理論の影響などにも触れながらまとめている。

一方、日本国内では常にアメリカをはじめとする海外事例の紹介、分析という形での研究が進められてきた。棚橋源太郎よって children's museum は「児童博物館」と訳され、1916年(大正5年) 頃からブルックリン、ボストン、ピーポディなどの事例が紹介されている[6]。その後も木場一夫ら多くの人達によって海外事例を通して、日本国内でも早急に整備されるべきだとする主張が繰り返されてきた[7]。

さらに、かなり時は下り、1984年に生活構造研究所編『世界の博物館は、いま－21世紀の科学館をめざして』が発行される[8]。「第3章　科学を遊ぶ　子ども博物館」でボストン子どもの博物館の当時館長であった、マイケル・スポックのインタビューを掲載し、子どもの博物館の存在を広く知らしめたものとして位置付けることができる。

その後、上野勝代をはじめとする京都府立大学生活科学部住居学科住生活講座のメンバーは1990年から1992年まで、子どもの博物館に関する研究を発表している[9]。上野らの研究は調査を下に、展示の手法だけでなく、それを支えるバックボーンとしての子どもの博物館の思想、歴史、展示構成、内容なども明らかにしており、今後の研究にも活かされる豊富なデータを提示している。中でも「アメリカにおける子どもの博物館の展示内容に関する研究」(1990 a)は子どもの博物館の展示が、「芸術／遊び／生活文化／科学・自然」の4つの分野にまたがり、多方面から総合的に紹介してゆくことを目指したものとして展示の分析を試みており、理工系を中心としている日本の子どもを対象とした博物館に示唆を与えるものとなっている[10]。また、日本における子どもの博物館の試みとして滋賀県守山市の「守山子ども博物館」の活動についても調査を行い、沿革、展示内容、スタッフの属性などについて明らかにした[11]。

この他では、1993年には、八並勝正がアメリカ・カナダの子どもの博物館について調査を行い、歴史、現状を示したうえで、有能なスタッフの育成や性教育の一端を担うことなど、日本の科学館の今後の活動への提言を示している[12]。また、世古一穂[13]、三木美裕[14]、染川香澄[15]、大月浩子[16]、大塚和義[17]らが様々な角度から国内外の子どもの博物館の事例を紹介している。

2．子どもの博物館の機能における特徴

これまで日本には子どもの成長を総合的に支えていく子どもの博物館のような展示を持った施設は存在しなかったために、その機能上の特徴を正確に把握し、そこから何かを学び、博物館の活動に活かすことは非常に困難なことであった。例えば、八並勝正（1993）は科学博物館、動物園・水族館・昆虫館、美術館、植物園、ディスカバリー・ルームの各要素を取り入れて総合化したものといったとらえ方をしている[18]。また、太宰久夫（1989）は「遊びの空間」としてとらえ、「本来の役割は日本と少し異なるが、児童館または児童センター的空間として考えていいだろう」と述べている[19]。また、上野勝代ら（1990 a）の研究においても、展示を「芸術」「遊び」「生活文化」「科学・自然」「その他」と分類して分析し、子どもを取り巻く環境を広く取り扱う博物館としての子どもの博物館の特徴を明かにしようと試みられている[20]。さらに大塚和義（1995）によって「子どもが可能な限り主体性を持って、博物館を道具として知性や感性を研ぎ澄まし、社会性などを身に付けていく実際」が具体的に取り上げられ、社会的役割という文脈の中で捉え、子どもの博物館の社会的性格を明示している[21]。その他、前節で挙げたような国内外の博物館学的アプローチ、建築学的アプローチ、児童学的アプローチ等様々な研究、報告によって子どもの博物館の機能上の特徴が浮き彫りになりつつある。これらを踏まえた上で、子どもの博物館の機能上の特徴を次の4点にまとめて提示したい。

第１点めは子どもの成長を支えるという姿勢が重視されている点である。換言すれば、来館者（子ども）中心主義の立場に立っての運営である。クリーヴァーは

> 子どもの博物館の基本的な目的は、展示の中で生活の断片を自分たち自身の生活や世界全体と結び付けて見せてくれることである。[中略] 博物館の根本的な役割とは私たちがまわりの世界と関わっていくことを助けることである。

と述べている[22]。これは、アメリカの子どもの博物館の役割についての代表的な考え方の一つである。もの（資料）について子どもにも分かりやすく解説することに主眼が置かれるのではなく、子どもがどんなことに興味を持っているのか、子どもが成長する社会はどんなもので構成され、どんな仕組になっているのかといったことについて子どもの視点から出発し、博物館の活動の要としてきちんと位置付けられることがまず必要とされる。

第２点めは来館者の身体的、実践的な学習の場となることである。ハンズ・オン（hands・on）の展示についてはこれまでにもいくつかの研究成果があり、参加体験型展示と訳さず、そのままハンズ・オンという言葉が使われることが一般的となった[23]。単に手で触れる展示の形式を指すのではなく、身体感覚を通して楽しい印象や実感を伴った知を獲得できるような展示の手法であり、子どもの博物館の重要な理念であるという認識も広く受け入れられるに至っている。この身体性を重視するということは、発達理論や学習理論の反映とも言い換えることが可能である。人を引き付け、さらに引き込み、自分で考えて何かを発見できる、来館者が主体的に関わることのできる展示については今後もより実証的な研究が求められる分野である。

第３点めは相互作用（interaction）を喚起する点である。ここで言う相互作用とは、もの（資料、展示）と来館者、来館者と博物館スタッフ、来館者同士などの間での様々な相互作用を含む。子どもの博物館に関する数々の文献では「わくわく楽しい」とか「子どもが子どもらしく自由にのびのび」といった表現が実に多く見られる。このような状況を可能にするのは、危険や禁止事項が少なく安心して遊ぶことのできるスペースと同時に相互作用の要素ではないだろうか。ものと人の間での相互作用についてはインタラクティブ・システムのビデオを導入するだけではなく、上で述べたように来館者が能動的に働きかけることができるような展示が求められる。また、人と人の間での相互作用に関しては、来館者

研究(visitor study)の分野での成果を参考にすることができる。ジョン・H・フォーク(John・H・Fork)、リン・D・ディアーキング(Lynn・D・Dierking)は「博物館は社会的な場であるのに、多くの博物館が社会的な相互作用に対する障壁を作ってしまっている」とし、静粛を呼びかけたり、展示内容のレベルが高度過ぎることが来館者の学習上重要な意味を持つ「会話」の障害になるということを指摘している[24]。この指摘は全ての博物館に当てはまるものではなく、その場での会話が喚起されるような展示が全ての博物館に求められるとは考えられないが、子どもの博物館における展示は、会話や人と人とのやりとりが、自然に発生してくるものであることが重要であろう。子どもの博物館とは言っても、その来館者の約半数近くは大人であることが多くの博物館によって報告されている[25]。このような事実からも親子が共に時間を過ごす場所としての博物館の在り方を考えるためにも相互作用を考慮に入れた展示を準備する必要性があるだろう。

第4点めは子どもたちへのメッセージ伝達を行う点である。子どもたちに何かを伝え、共に考えていくメディアとしての展示の位置付けが非常に重要とされる。1914年に開館して以来、30館を越える多くの館の手本となり、リーダー的役割を果たしているボストンの子どもの博物館(The Children's Museum, Boston)の見学、展示や文献資料の分析を通して、「子どもたちに何を伝えていくのか」、つまり、次代を担う子どもたちへのメッセージが非常に大切にされていることを見いだすことができた[26]。

また、レグニアは「博物館は変わり行く社会についてモデルやその多文化的な側面を提示するのに役立つという、より大きな社会的目的」についてさらに強調されるべきであると主張し、「この点は重要であり、子どもの博物館が今後前進するのに特に役立つことであろう」と述べている[27]。このように、子どもたちへのメッセージを考えることは、つまりは自分たちの住む地域の将来について考えることである。このようなテーマに正面から取り組む子どもの博物館は非常に対社会的な機関としての性格を持っている。

以上、機能上の観点から子どもの博物館の展示の4点の特徴を提示した。各々の特徴は互いに影響を及ぼし合って存在するものである。これらは全く新しい機能というわけでも、子どもの博物館のみの特徴であるというわけでもなく、様々な博物館と共有している点もある。また子どもの博物館の機能的特徴が以上の4点で全てであるというものでもない。だが、子どもの博物館の、特に展示を考える際、以上の4点は重要な柱であって、このうち一つでも欠けると有効に機能しない必要不可欠なものだと言えるのではないだろうか。

3．メッセージ伝達機能の重要性

前章で示した4つの機能的特徴の中で、これまでは来館者の身体的、実践的な学習の場としての子どもの博物館という面のみが強調されてきた感が強い。今後は社会の現状を正確に把握し、どのようなメッセージを発信・伝達するのかを考察する作業がさらに重視されるだろう。現在の日本の子どものための展示ではこの一見当り前のことが本当に実現されているのかという問直しがあえて必要ではないだろうか。福島正和(1997)によっても同様に次のように述べられている[28]。

> わが国でも子どものための博物館が増えてきたと書きましたが、その施設性格においては漠然としたものが多いように思われます。たとえば何歳程度の子どもを対象としているのかが曖昧であったり、何を伝えたいのかが見えなかったりと、わが国の子ども博物館は未だその啓蒙期を迎えていないというのが実情です。[中略]こどものための文化施設とは、私たち大人が子どもたちといっしょに未来についてコミュニケーションすることができる、ささやかなインターフェースなのかもしれません。

子どもの博物館に限らず、これまでの博物館研究の中ではメッセージ伝達機能はそれほど強調されて取り上げられてこなかったが、伊藤寿朗によって「市民に対し、博物館主体として、どのように吟味され、注意深く検討されたメッセージを提起することができるのか、活動の内容と質が深く問われているのが現代の博物館である」という主張を見ることができる[29]。子どもの博物館に引き寄せて、この機能についての記述を探すと、八並勝正が子どもの博物館の特徴の一つは過去だけでなく、過去と現在の接点、

さらに未来の方向を示そうとしていることであるとし、「未来志向型」という言葉を使っている[30]。また、染川香澄も「こういうことをこどもに伝えたいという根っこのところ」といった表現でメッセージの重要性を指摘している[31]。1つめの特徴としてあげた「来館者中心、子ども中心」ということは、子どもの興味に基づいた展示を作るとともに、展示を作る大人からも子どもに伝えていきたいことを吟味し、それらが融合された形でまず核として置かれ、そのための資料の収集・研究・展示・その他の活動が構成されるということも意味する。

4．日本の子ども対象の博物館のメッセージ

(1) 日本の子どもの博物館

では、実際これまでの日本の博物館では子どもにどのようなメッセージが発信、伝達されてきたのだろうか。戦後に設立した子どものための博物館について概略をみてみたい。

戦後の子どものための博物館は主に理工系を中心に発達してきた。日本博物館協会編『全国博物館総覧』に記載されている博物館の中で「子ども」「児童」「青少年」「少年」という言葉を名称に持つ博物館50館中37館(74%)が理工系の科学館である[32]。展示の内容に関しては、ほぼ同様の方法で調査対象を抽出した高瀬交子らの研究の対象館43館中でも、プラネタリウム／宇宙(28)、現代の技術(27)、ニューメディア(25)、物理原理(25)といった内容が多いことが明らかになっている[33]。また、若月憲夫は、科学館設立の推移について分析しているが、若月の対象とした47館の科学館のうち、33館が「子ども」「少年」「青少年」という言葉を名称に含んでいる[34]。また、全国科学博物館協議会編の『全科協データブック』の科学系施設一覧でも、1,613館中71館が「子ども」「児童」「少年」「青少年」という言葉を使用している[35]。

(2) 発展の背景とメッセージ

さて、上に示したように子どもの博物館は科学館を中心として発展してきたのはなぜだったのだろうか。一つには、「科学」が青少年の健全育成に役立つものとして考えられたことがあるだろう。高瀬らによっても指摘されているたように、戦後間もない昭和23年頃から青少年犯罪は深刻化し、青少年問題が検討されるようになる。昭和30年代以降も状況は変わらず、さらに深刻になっていくため行政によって様々な施策がなされるが、その中で「健全育成」がキーワードとなってくる[36]。その健全育成の方針は大きく分けて2つあり、覚醒剤や有害図書など有害物を取り除く方向と学びの場の整備など健全育成施設を整備する方向である。後者の中に青少年育成施設としての博物館が位置づけられる。例えば、昭和38年に開館し、科学展示室と児童遊園からなる岡山県立児童会館に関しては「健康で情操豊かな青少年の育成とその福祉の増進のため建設されたものです」と述べられている[37]。また昭和39年開館の帯広市児童会館でも宿泊施設の児童文化センターと展示を持つ青少年科学館の複合施設であるが、「急激に進展する社会情勢の中で、次代の担い手となる児童生徒並びに一般青少年の健全な育成と基本的な科学知識の修得の場」であると述べられている[38]。このように、健全育成を目的とした児童館にプラネタリウムやその他の理工系の展示が設置され、博物館として機能しているケースは多い。また近年開館した比較的新しい科学館においても「健全な発達を計る為」[館林市子ども科学館，平成3年開館]といったような言説は多くみられる[39]。

また、分類上は理工系の科学館となっているが、科学だけでなく、文化も大切な要素としている博物館も多い。例えば、昭和46年に少年文化会館として開館し、昭和56年にプラネタリウムを設置したのに伴い、昭和58年改称した福岡市立少年科学文化会館は、工芸室、絵画室、音楽室、天文台などを備え、「子どもたちの科学する心、文化を創造する心を育てる」としている[40]。このように、科学で合理性を、文化で情操をといった考え方も多くみられる。

その根底には、科学や文化は夢や希望を与えてくれるものとしての認識がある。上にあげた帯広市児童会館のスローガンは「青少年に夢と希望を」となっている。館林市子ども科学館も「青少年に夢を」をテーマとしている。また、昭和63年開館の栃木県子ども総合科学館の「21世紀を担う子どもたちの科学する心や態度を培い、心豊かで創造性に富んだ社会人として成長することを願って」と

いう記述もみられるように、未来に向けての創造力を養ってくれるものとしてもみられている[41]。

このように、戦後の子どもの博物館は「科学知識や合理性を身につけてほしい」「科学を通して夢とロマンを持ってほしい」「科学や文化で創造性を養ってほしい」「そのような子どもたちに次代を担って社会を作っていってほしい」というメッセージを発信・伝達してきたとみることができる。

しかし、上に示した福島正和による指摘に代表されるように日本の子どもの博物館の展示に対して「画一的」または「海外事例の単なる模倣」といった批判は後を断たない[42]。また「科学」そのものに対する見直しの期を迎えた今日、理工系の子どもの博物館も転換を迫られている[43]。これまで、日本においては、科学技術の進歩を支えるように、科学の世界の持っている驚きや夢を伝えようというメッセージを伝達するために子ども科学館が全国に数多く設立されてきた。現在では子どもの理科離れも深刻な問題となっており、子ども科学館に対する期待はますます高まると考えられることも確かである。だが、その他でも子どもを取り巻く環境や社会全体に深刻な問題が山積しており、今後子どもの博物館は、地域に根付き、時代に即したその館独自の次代へのメッセージを伝達していく場としての機能を持つことがより強く求められる。

5．ボストン子どもの博物館のメッセージ

(1) 理念に見るメッセージ

ハンズ・オンという体験型の展示で遊びながら、自分と自分を取り巻く社会について知り、これからの生活を考えていく場にすることが子どもの博物館の大切な役割であることは先に述べた通りである。展示はそのためのメッセージの具体化の一つの有効な手段としてみることができる。地域の抱える社会的な問題に目を向け、メッセージを伝えるという立場に立っていることが最も明確な子どもの博物館の一つにボストンの子どもの博物館がある。同館については、様々な形で研究、報告がなされてきた。だが、メッセージの伝達機能という視点から今一度、同館の活動を丁寧に検討することによって、今後、量、質ともに発展するであろう日本の子どもの博物館の機能の充実に役立つのではないだろうかと考え、以下に、ボストンの子どもの博物館の子どもへのメッセージとしての理念と対応させながら、メッセージ伝達機能の方法について具体的に示すものである。

1913年に教師や大学の教授によってボストン子どもの博物館の母体となる団体は、「子供達に教室の授業ではできないような体験をすることによって学習をして行く場を与えよう」という目的で設立された。同館発行の日本語資料によると、現在は次のような理念を掲げている[44]。

ア．当ミュージアムは、子供達が自分たちの住む世界を理解し楽しむことの手助けをする。

イ．子供達に早くから博物館という環境を体験させるため、当ミュージアムはくつろいだ雰囲気ではあるが、展示の内容及び目的は「本物を用いた直接体験と楽しむことは学習の助けとなる」という信条に基づき、一貫してとても真剣なものである。さらに多岐にわたる学習者が利用できるよう、様々な展示方法及びプログラムを利用する。

ウ．当ミュージアムは、子供たちが人間と自然界を尊重すると共に、自分に自信をもって安心して成長してくれることを願っている。想像力、好奇心、疑問をいだくこと、そして現実にしっかり目を向けることを奨励し、人間ひとりひとりの違いを理解すること、自分の住む世界への積極的参加、新しい洞察への機会を与える。

以上３点の中でもウの理念においては、ボストン子どもの博物館のメッセージが最も明示されていると言えよう。子どもが成長していく過程において、「人間と自然界を尊重すること」「自分に自信を持つこと」など獲得してほしい価値観を提示している。これはアの理念とも関連するが、子どもがこれからの生活においてどのように考えて生きていけば幸せになれるか、また住みやすい社会環境を作っていけるのかという次代を担う子どもたちへのメッセージを読み取ることができる。

アメリカは多人種、多民族、多文化国家であり、それに起因する偏見や差別は根深い。ボストン子どもの博物館では、「90年代、子どもたちはさらに

多様化する社会で育つわけであり、そこで文化的意識(cultural awareness)を発達させていくことは重要だ」と考えられ、「多様性(diversity)」を肯定的にとらえていこうというメッセージが全面に出てくるようになり、それに伴った組織作りや展示、その他の活動が行われるようになる[45]。そのメッセージが最も直接的に現れている展示はキッズ・ブリッジ(THE KIDS BRIDGE)である。メッセージの伝達の手段としてのこの展示を詳しく検討し、同館のメッセージの具体化の方法を明らかにしたい。

(2) メッセージの伝達手段としての展示(キッズ・ブリッジ)

キッズ・ブリッジは1990年4月から始まったボストン子どもの博物館の展示である[46]。2階に設けられたその展示スペースの入り口には「自分について知り、隣人と仲良くし、偏見と差別と戦うことができる方法」と書いてある。また開設当時に発行された資料には「キッズ・ブリッジは実際の橋であり、展示でもあり、そして子どもや家族や、教師が私たちの社会の最も困難な、そして答えの出ない問題にアプローチするためのメタファーでもある」と説明している[47]。上でも触れたように、アメリカ社会における多様性はしばしば偏見や差別を生み出す原因となってきた。しかし、同館はこの社会の多様性はマイナスの面ばかりではなく、むしろプラスの効果もあるのだということを積極的にアピールしようとしている。また偏見や差別の問題を人類の平等の観点から解決しようとするのではなく、人種間の違いをそれぞれの伝統や文化の違いとして認めること、また人間一人一人の違いを認めることによって、自分に自信を持ち他人も尊重することを奨励している。

同館において、現在のようにメッセージとして「多様性」がクローズアップされるにいたるまでには、長い年月がかかっている。まず、1960年から70年代にかけて、博物館はあらゆる人のものであるという意識が現れ、まず入館料や各種活動の参加費の値下げが行われた。その意識は1979年の移転に際して、どの文化からも中立な立地である現在の場所が選ばれたことにも表れている。また1962年から1986年にかけて館長としてリーダーシップを発揮してきたスポックは、コミュニティサービス部を設置するなどしていたが、そのための諮問委員会の設置など本格的に「多様化」を推進したのは後任のケネス・ブレッカー館長(Kenneth S.Brecher)であった。ブレッカーのもと、アイレット・ジェネス(Ayltte Jennes)、ジョアン・ジョンズーリッジ(Joanne Jones-Rizzi)らによって人種問題のプログラムは進められた。パトリシア・A・ステュアート(Patoricia A Steuert)によれば、そのプログラムは次の5点を目的としていた[48]。

①より広いボストン地区の人口比率を反映した来館者の多様化
②全ての部門やレベルでのスタッフの多様化
③評議委員会の多様化
④文化的多様化についての家族のための展示の製作
⑤多様化という点からみた全ての展示とプログラムの見直し

また、時代背景として、1980年代の市民権運動、ボストンパブリックスクールの人種差別撤廃、女性解放運動、障害者のための法律の制定、移民のための民主化の動きなど外的な圧力もあったと説明している。

上に挙げた④として生み出されたのが、キッズ・ブリッジであった。展示の形になるまでには、何百人もの来館者に文化の定義に関するゲームに参加してもらったり、伝言板で意見を求めたり、自分や家族についての絵をかいてもらったりしながら、2年以上の月日が費やされた。これは、まず子どもたちがどのように文化の多様性をとらえているのか、子どもの意識の把握から始まっている。またこのような試行錯誤の中で子どもたちに自分たちの言葉で話してもらうことが有効な方法であることも見いだされていった。この方法は実際に差別を受けた子どもがその展示のビデオの中で、その体験や考えを語るという形で実現された。

この展示は、橋の形をした46フィートの通路があり、それを渡って奥に進み、壁面にあるパズルやQ&A形式の展示、インタラクティブシステムのビデオブース、いろいろな文化を表す音楽やものの展示などを楽しみながら元の場所に戻ってく

るという導線になっている。その中の一つに、次のような展示がある。壁面に30人ほどの顔写真のパネルがあり、その下部に斜めになったテーブルがある。その上にはやはり約30のボタンがある。「誰があなたに似ているでしょう？」という問いかけに対して、ボタンの横の「私は歌が好きです」「私は料理が得意です」などの言葉を読み、選んで押すと、該当する何人かの人物の顔写真が光る仕組みになっている〔写真〕。30人の人物の中には、有名人も一般人も、子どもも大人も、黒人も白人も黄色人もいるが、そのような外見上の違いとは関係なく、例えば「歌が好き」という項目に該当する人の写真が光る。この展示にじっくりと時間をかけて、自分と好みや得意なものが似ている人を探すことができれば、子どもは自分や他人の外見的な違いに関わらない内面的な異同性について自然に考えるようになるだろう。また、子どもがビデオに出演し、自分の言葉で自分の文化や偏見、差別について語っているブースがある。このように、メッセージの伝達と言っても、単にこうなってほしいという願いを一方的に提示するのではなく、ともに考えていこうと呼びかけ、そこに参加してもらうような展示が考えられている。そのようなシステムの中では、子どもは保護や教授の対象としてではなく、権利を持った個人として認められている。子どもが展示のビデオの中で語り、子どもがそれを見てインタープリテーションの中で友達同士やインタープリターと話し合うといったように博物館でのコミュニケーションは単なる循環機構のみで解釈されるのではなく、複線化し、ますます複雑で豊かなものになっていく。

この展示に関して、リッジは、「自己を尊重することと他者の文化を理解することは、多様性や人種差別が生み出す苦痛を理解するという目的にとって重要であり、この目的を達成するために、展示の前半部は言葉や映像を使って自己像を描き出し、一見自分と全く違うと感じられるような人との共通性を見つけて楽しむ事ができるものになっている」と説明している[49]。

リッジによれば、多文化の問題に対する関心はボストンやマサチューセッツ州の最近の人種別人口比率の変化に合わせて、急速に高まってきたものである。そして、人々のこの展示に対する反応は大多数が肯定的なもので、また、来館者だけでなく、多文化問題に取り組む他の機関からの問い合わせも多く、学校での学習にも利用された。こういった意味からも、リッジはこの展示は成功したと断言しており、さらにこの知識を博物館専門職員の間で共有のものとしていきたいと述べている[50]。

キッズブリッジの展示

この展示は、複雑で多様な社会で、それぞれの違いを尊重できる人間に育ってほしいというメッセージの伝達の手段として慎重に作り上げられたものである。

またボストンの子どもの博物館の活動をみていると、展示に対する柔軟な姿勢を持っていることが分かる。それは、一つには社会は常に変わるものであり、問題も常に変わるものであるとの考え方の証しである。また同時に展示は来館者へのメッセージの伝達であり、問いかけでもあると考

えられているからではないだろうか。キッズブリッジの展示についてのパンフレットに

> 例えば、これまで「死」や「障害」といったほかの難しい問題についての展示やプログラムやカリキュラムに取り組んだ経験を通して、将来博物館は、この時代の中心的な問題について話し合うフォーラムとして、またありきたりでない方法で学び、人々に疑問を投げかけ、かけ橋となるような文化施設としての重要な役割を有していると信じるようになった。

と述べられているように、絶対的な回答を教えるのでなく、フォーラムとしてみんなで話し合っていく場しての姿勢がみられる[51]。大月浩子も、「最近のアメリカの子どもの博物館の展示として、環境問題や異民族間コミュニケーション、食べ物、エイズ、死といった時代を敏感に反映したテーマが目に付くようになった」と述べている[52]。このようにアメリカでは、子どもが現実の社会に目を向け考えていくためのメッセージ伝達の機能がますます重視されつつある。

4．トライアル（trial）システムの確立

以上のようなキッズ・ブリッジの事例から、博物館は展示というメディアを使いメッセージを伝達することを一つの目的としている機関であることが明らかになった。その中でも子どもを対象としている子どもの博物館は展示の作り手である大人から子どもへの、言い換えれば次世代へのメッセージの伝達の場であるという性格が最も明確である。したがって、まず現実の子どもを取り巻く環境や社会を分析すること、そして何を伝えるのかを検討していくこと、その上で最もふさわしい展示を作ることが必要となる。また同時に子ども自身の世界観や興味の在り方も十分に考慮し、展示をつくらなければならない。

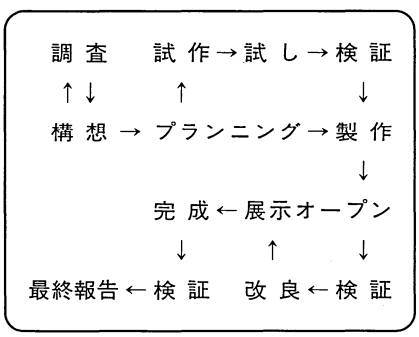

表1　プランニングの過程（三木、1997）

このような展示作りを可能にする方法として、トライアル（trial）システムを確立することが有効だと考えられる。このシステムは展示の本格オープンの前に来館者に実際に試してもらい、その反応を見て改善を加えるシステムである。トライアルに関しては、三木美裕による表1のような説明を見ることが出来る[53]。例えば、ボストンの子どもの博物館では、アンダーザドック（UNDER THE DOCK）という展示の開発段階で博物館の屋外のスペースを利用して展示を公開し、そこでの来館者（子ども）の反応を活かして実際の展示が構成されたという報告がある[54]。また同館では「あなたの展示に対する意見を聞かせてください」といった意見箱や展示の作成にも生かされる意見交換のための壁の伝言板など、地域の人たちの声に耳を傾けるためのシステムが工夫されている。ボストンの子どもの博物館の展示は基本的に常設展という考え方を取らず、1～5年といった比較的短い期間で変わるものも多い。これは、展示の問題点や社会の状況を見て、より良い展示を作っていくという館の柔軟な姿勢の現れと言えよう。

近年、必要性が指摘されているエヴァリュエーション（evaluation）についても展示も含めたプログラムの開発において重要なものだと考えられる。以上のようなシステムが確立されることによって、子どもたちがどんな関心を持ち、子どもたちに何を伝えていくべきかという基本的ではあるが非常に重要な視点から構成された展示が出来上がるだろう。

おわりに

子どもの博物館の機能上の特徴を明らかにすることによって、住民たちがこれからの社会を作っていく上での活発な議論の場となるため慎重に吟味された次代へのメッセージを展示を通してとして伝達することができる貴重な機関の一つだということを示した。

本論文では詳しく取り上げなかったその他の機能的特徴についても今後検証していく必要があると考

えている。さらに、日本で新しいタイプの子どもの博物館が形になっていくにつれて、新たな課題も生まれてくるだろう。本格的な子どもの博物館研究はまだ始まったばかりで、資料の保存と活用の問題やスタッフ研修の問題、従来、博物館が対象としてこなかった乳幼児に対する活動の在り方など数多くの課題がある。これらの課題についてより実証的に検証していくことも今後の課題である。

〔註〕

1）children's museum は「子ども博物館」または「こども博物館」と訳されることが多いが、本論文では、子どものための博物館という意味も込めて所有格の「-'s」も直訳するという染川香澄の意見をもとに「子どもの博物館」と表記する。

2）本論文では博物館法でいう登録博物館だけではなく、相当施設、類似施設まで全て含めて「博物館」と呼ぶものとする。また、子どもを主な対象とした博物館のことを「子どもの博物館」という言葉で表す。ただし、棚橋源太郎らによって使われていた「児童博物館」や現在、各館の名称に使用されている「子ども科学館」「子ども博物館」などの語は固有名詞としてそのまま使用するものとする。
また、「メッセージ」という語については、伊藤寿朗が『ひらけ、博物館』岩波ブックレット NO. 188、岩波書店、1991、pp.8-9や『市民の中の博物館』吉川弘文館、1993、pp.139-140で使用しており、これに着想を得たが、伊藤はこの言葉について明確な定義を行っていない。本論文では、「メッセージ」とは「伝達することを前提とした、方向性を持った重要な思いや考えや願い」という意味で使用する。

3）例えばボストン子どもの博物館からは
Jeri Robinson, Patricia Quinn *PLAYSPACE —creating Family Spaces in Public Places—* A Boston Childre's Museum Publication, 1984など多数発行されている。

4）Victor Regnier "The Children's Museums: An Introduction and Overview" *Children's Environments Quarterly* Vol.4, Number1, Spring, 1987

5）Joanne Cleaver *Doing Children's Museums —A Guide to 265 Hands—On Museums—* WILLIIAMSON, 1992
なお、AYM (Association of Youth Museums) の加盟館は約160館であり、子どもの博物館数はその定義によってかなり差がある。

6）棚橋源太郎「児童と博物館」(児童学会第11回総会演説)『児童研究』20巻2号、1916、pp.51-52
棚橋源太郎「児童博物館問題」『博物館研究』vol. 3．No.4、1930、pp.4-10

7）木場一夫『新しい博物館—その機能と教育活動—』日本教育出版社　1949

8）生活構造研究所編『世界の博物館は、いま—21世紀の科学館をめざして』紀元社、1984

9）上野勝代・宇賀万希子・高梨薫・佐々木博子・高瀬交子「アメリカにおけるこども博物館の展示内容に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第30号・計画系：建築計画、1990 a、5048：pp.401-404
上野勝代・宇賀万希子・高梨薫・佐々木博子・高瀬交子「アメリカにおけるこども博物館の歴史とその平面計画」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第30号・計画系：建築計画、1990 b、5049：pp.405-408
上野勝代・高梨薫「生活体験学習の社会教育施設としての"アメリカのこども博物館"に関する研究」日本消費者学会編『消費者教育』第10冊、1990 c、pp.217-232　高梨薫・上野勝代「アメリカのこども博物館における総合的展示の先進事例」日本建築学会1990年度大会（中国）学術講演会研究発表梗概集』建築計画、1990 d、5159：pp.317-318
高梨薫・上野勝代・高瀬交子「アメリカのこども博物館の体験型展示に関する研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第31号・計画系：建築計画、1991、5002：pp.225-228
上野勝代・高瀬交子「日本におけるこどもの施設の現状に関する調査研究」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第32号・計画系：建築計画、1992、5056：pp.441-444

10）上野勝代・宇賀万希子・高梨薫・佐々木博子・高瀬交子　前掲9）1990 a

11) 上野勝代・高瀬交子・宇賀万希子・佐々木博子「日本におけるこども博物館の試みと参加者像に関する研究—守山市における事例より—」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第30号・計画系：建築計画、1990、5047：pp.397-400
上野勝代・高瀬交子・高梨薫「日本におけるこども博物館の試みと参加者像に関する研究II—守山市における事例より—」『日本建築学会近畿支部研究報告集』第31号・計画系：建築計画、1991、5003：pp.229-232
12) 八並勝正「アメリカ・カナダの子ども博物館」『児童研究』vol.72、1993、pp.2-12
13) 世古一穂「子どもミュージアムと環境教育環境学習とまちづくりの視点から」阿部治編『子どもと環境教育』東海大学出版会、1993、pp.176-192など
14) 三木美裕「こどもがこどもらしくしていられるところボストンチルドレンズ・ミュージアムのこどもたち」『DOME』vol.9、1993、pp.10-11
15) 染川香澄『子どものための博物館』岩波ブックレット No.362、1994、岩波書店など
16) 大月浩子『わくわくミュージアム　こどものための美術館・博物館』婦人生活社、1994
17) 大塚和義「7．子どものための博物館」『博物館学II　現代社会と博物館』(放送大学教材) 放送大学教育振興会、1995、pp.75-87
18) 八並勝正　前掲12)
19) 太宰久夫「チルドレンズ・ミュージアム—アメリカ合衆国南カルフォルニアを例に—」『世界の児童と母性　海外福祉情報』第27号、資生堂社会福祉事業財団、1989、pp.60-64
20) 上野勝代・宇賀万希子・高梨薫・佐々木博子・高瀬交子　前掲９）1990 a
21) 大塚和義　前掲17) p.75
22) Joanne Cleaver op. cit., p.11
23) 染川香澄・吹田恭子『ハンズ・オンは楽しい見て、さわって、遊べるこどもの博物館』工作舎、1996、他
24) ジョン・H・フォーク、リン・D・ディアーキング著　高橋順一訳『博物館体験』1996、雄山閣、pp.163-164
25) ボストン子どもの博物館では子ども55%、大人45%(1992)、東京都児童会館では子ども54.3%、大人45.7%（平成７年）という記録がある。
26) 1995年11月１日、ボストン子どもの博物館において、スタッフErin O'BrienとLaura Kreutzerへのインタビューを行った。
郵送、ファクシミリでの問い合わせには、Shoko Kashiyamaに1995年10月10日に郵送で、同年11月20日にファクシミリで回答いただいた。
また、Joanne Rizziには1996年10月15日に電子メールで、同17日にファクシミリで回答いただいた。いずれも英文。
27) Victor Regnier op. cit., p.2
なお、この点については、草野以知子が次のように分かやすく補足的な解釈を行っている。
変わりつつある社会の文化の様々な側面について、モデルとなったり、来るべき方向を示すことができる博物館、それが博物館の大きな目標であることを強調することが欠けている。
草野以知子「つながる　ひろがる６　もっと知りたいこどもの博物館」『エヴァ』No.７、エヴァ文化研究所、1995、p.３
28) 福島正和「こどもと博物館の新たな地平を求めて」『月刊ミュゼ』vol.26、1997.12、p.15
29) 伊藤寿朗　前掲２）1993、pp.139-140
30) 八並勝正　前掲12) p.３
31) 染川香澄　前掲15) p.27
32) 日本博物館協会編『全国博物館総覧』ぎょうせい、1995
33) 上野勝代・高瀬交子　前掲９）1992
34) 若月憲夫「体験学習施設としての科学館の発展経緯と今後の展望」『文環研レポート』No.５、1994、pp.１-６
35) 全国科学博物館協議会編『全科協データブック』1993
36) 行政の施策の背景に関しては
柘植千夏「博物館利用者としての子ども」『日本マネージメント学会研究紀要』創刊号、1997、pp.21-29
37) 岡山県立児童会館発行リーフレット
38) 帯広市教育委員会社会教育部児童会館『開館30周年記念誌30年のあゆみ』、1994、p.8

39) 館林市こども科学館発行パンフレット p. 2
40) 福岡市立少年科学文化会館発行リーフレット
41) 栃木県子ども総合科学館『栃木県子ども総合科学館年報　平成6年度版』1995、p.2
42) 福島正和　前掲28)
43) 若月憲夫・斎藤恵理・村山にな『博物館の行方・科学館―時代の変節点にたつ科学館―現在の課題と今後の展望を探る』『Cultivate』創刊号、1995、p.55
44) ボストン子どもの博物館発行日本語資料「ボストンチルドレンズミュージアムについて」1992 この中で「子供達」「子供たち」など、表現が統一されていない部分が見られるが、原文のまま用いるものとする。
45) The Children's Museum, Boston "KIDS BRIDGE", パンフレット、1990
46) この展示は1996年秋に終了した。体験を重視する子どもの博物館において、比較的、体験要素の度合いの低いこの展示は、字を読まなければならないことと写真が光るだけと見た目に変化が少ないことから、ある程度年齢の高い子ども向きの展示と言えるだろう。筆者の見学中も小学校低学年またはそれ以下の子どもは1つか2つボタンを押しただけで走り去っていったが、小学校高学年ぐらいの男子が一人で5分以上繰り返し熱心にボタンを押している姿を見ることができた。ただし、引率の大人や年齢の高い子どもと一緒であれば幼い子どもでも十分楽しみ、かつ多様性について考えるきっかけを与え得る展示であろう。
47) The Children's Museum, Boston op. cit.
48) Patricia A. Steuert, Aylette Jennes, Joanne Jones-Rizzi *Opening The Museum*
－History and Strategies Toward a More Inclusive Institution－
The Children's Museum, Boston, 1993, p. 13
49) Joanne Rizzi 1996.10.17のファクシミリ
50) Joanne Rizzi ibit.
51) The Children's Museum, Boston op. cit.
52) 大月浩子 前掲16)、p. 7
53) 三木美裕「今日から、誰にでもできる体験型展示」『月刊ミュゼ』vol.26 1997、pp. 8－9
54) 染川香澄　前掲15)